

別記様式第1号（第4条関係）

木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会 開催結果の要旨

会議名	第2回 木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会				
日時	令和3年10月15日（金） 午後2時～4時5分	場所	木津川市役所5階 「全員協議会室」		
出席者	委員	■榎原 権宏（委員長） ■岡田 敏（副委員長） ■中川 嗣郎 ■島本 秀美 ■山下 智義 ■的場 千里 ■林 真衣 ■和田 妙子 ■武田 博信 ■行衛 満 ■坂寄 正男 ■福本 桂子 ■高井 啓介 ■渡部 基信 ※□：欠席者			
		その他出席者			
	事務局	竹本部長、遠藤理事、大村理事、木下課長、西村主幹、 山口主幹兼総括指導主事、藤田課長補佐、齋藤担当係長、 寺内主事 オブザーバー：学校教育指導主事			
議題	1. 開会 2. 事務局挨拶 3. 議事（資料：第2回学校の在り方検討委員会） （1）報告事項 ① 中学校区ごとの児童・生徒数の推移 ② 学校規模による学校運営上の課題 ③ 市が目指す教育の方向性 （2）討議 木津川市における望ましい学校について 4. その他 5. 閉会				
審議結果要旨	1. 開会 事務局より、開会を宣言した。  2. 事務局挨拶 竹本部長より、開会にあたり挨拶があった。  3. 議事 （1）報告事項 ① 中学校区ごとの児童・生徒数の推移 資料を用いて、10年先を見越した議論に向け、中学校区毎に小・中学校の推移見込みを示し、令和9年度の児童数・クラス数の状況を報告した。				

	<p>児童数が急増している城山台小学校は、令和8～9年がピークと見込まれ、学年毎のクラス数は、8～10程度であり、大規模校運営上の課題を克服するべく、段階的・計画的に各施策を講じていることを、また、最も小規模である恭仁小学校は、令和4年度以降は毎年複式学級が構成され、令和9年には全校児童で29人となること、平成30年度に複式学級になった際には、時間割を工夫し全校体制で教科担任制に取り組んだ実績を紹介し、今後も工夫しながら学力向上を図っていくことについて説明を行った。</p> <p>② 学校規模による学校運営上の課題</p> <p>資料を用いて、最初に文部科学省の手引きが示す学校規模の定義を説明し、令和9年度には小学校で相楽・相楽台・木津川台・加茂・恭仁・南加茂台・上狹・棚倉小学校が小規模校となり、城山台小学校が過大規模校になること、また次に小規模校と大規模校の考えられる課題について説明をし、併せて、小規模校の課題は大規模校のメリットとなり、大規模校の課題は小規模校のメリットであることを含め説明を行った。</p> <p>③ 市が目指す教育の方向性</p> <p>資料を用いて、前回の委員会でも説明をした「市が目指す教育の方向性」について再度確認をした。</p> <p>(2) 討議</p> <p>資料を用いて、9年間を見通した新しい時代の義務教育の観点について確認をし、テーマを『10年先を見通した、木津川市のいろいろな「いい学校」について話し合おう』、討議によって目指す所を『10年先のいろいろな「いい学校」を支える条件は○○だ』といったキーワードを引き出す全体の流れについて説明をした後、ワークショップ方式で討議を行った。</p> <p>4. その他</p> <p>次回の委員会は、12月17日に城山台小学校で開催することとし、事務局より後日、通知することとした。</p> <p>5. 閉会</p>
--	---

#### 会議経過要旨

1. 開会
  - ・本日の会議は公開とすること等の了承を得た。
2. 竹本部長挨拶

先月末で緊急事態宣言は解除されたが、引き続き感染防止策を講じての開催となる。  
第1回でも、それぞれの立場や経験から貴重なご意見を頂いた。事前にお願いしている課題で

の内容も含め、子どもたちにとってどんな学校になればいいかという事について、考えられることについてご意見を頂き、議論をお願いしたい。

今日の議論の中身を今後のアンケートや審議にも活かしていきたい。

### 3. 議事

主な意見・質疑等は次のとおり。

会議録署名委員について、名簿順により島本委員を指名した。

#### (1) 報告事項

##### ① 中学校区ごとの児童・生徒数の推移

会議結果要旨のとおり。

##### ② 学校規模による学校運営上の課題

会議結果要旨のとおり。

##### ③ 市が目指す教育の方向性

会議結果要旨のとおり。

委 員：城山台小学校では、小学校へあがる子供たちが、どこの小学校へ行くか選べると聞いている。どれくらいの方が希望されているのか。

事務局：城山台小学校では、児童の急増対策として、特定地域学校選択制を取り入れている。

令和3年度においては、在籍している児童と新1年生のうち15人が他校を選んでいる。

そのうち1年生は8人。

来年度からは新1年生と新たに転校してくる児童が選択制の対象となるり。

#### (2) 協議事項

委員長：今日はワークショップ形式で行う。

10年先くらいを目指し、まとめていくことは気にせず、どんどんアイデア出して頂き、私も学びたい。

今日は、幅広くアイデアをお願いしたい。テーマになっている『いい学校』の条件とは』について考えていただくが、いい学校とは1種類という訳ではなく、学校を取り巻く状況や環境によるので、様々な視野やアイデアを広げるようなグループワークになればいいと考えている。

地域社会のあり方というのは、ヒト・モノ・お金という視点で考えるとすると、ヒトについては、先生の在り方もあれば先生方の働き方といったこともある。また子どもに視点を変えれば、日々過ごせる学校はどうなっているのがいいのか、行きづらい学校はまずいだろうというような点もある。

また、地域の方に支えられている学校もある、どういう方が関わられるのがいいのかというような事のアイデアもいいのではないか。

次にモノという視点では、授業や勉強といったものの中身も大事であるが、society5.0時代や、これからどういう環境に囲まれるのがいいのかというのもあれば、建物を含んだ学校の設備のあり方、設備の必要または不必要は何であるかという事もあるのではないか。

最後のお金については、あるに越したことはないが、限られたものであるので、同じ使うにしてもこういう風に使えばいいのではという事や、教育費は固定費が多い中で、少しでも余地を増やすような仕組みやアイデアがあればいいのではないか。

今話した事もヒントになればと思う。

#### ○グループ討議（A・B・C班に分かれて討議）

#### ○全体討議（グループ報告）

A 班：いい学校を支える条件としては、すべての学校を適正規模にする事が大事であるという点に主眼を置いた。それぞれの規模を同じにする事によって、具体的にできることがあり、人材についても適正な配置であったり、設備の充実を図れるのではないか。

設備については斬新的な意見もあり、ICTを進めるにおいても盲点があつて、コンセントが無いといけないが、クラスにある数は限られていて、ICTをやるために机にひとつずつコンセントが必要になってくるという事であつたり、その他にも、各家庭でのトイレは、ほぼ洋式にも関わらず、学校は和式であるために、男子に多いのが、和式便器を使うことができず、便秘になる子も実際にいるので、こういった設備の面でも、すべての学校を適正な規模にすることで、平等に配置することもできる。そういう事することによっていい学校になっていくのではないか。

規模がバラバラであると、様々な格差も出てくると思うので、それを無くすためにも、まずは適正規模にして、5つくらいの学校でどうか。

各学校によって、魅力ある先生・設備・クラブなどがあることで、子供たちが学校選択制でスクールバスを使うことになるが、5つくらいの規模であればやりやすいのではないか。

B 班：これをしたらいいという条件までは至らなかつたが、適正規模についてしっかりと議論できた。

小規模校が増えていっても、廃校ではなく分校として活用したらどうか、またモデル校になるような適正規模の学校を作つて、スクールバスなどを活用し市内全域から通えるようにしてはどうか。

一方で悩ましい点でもあるが、地域とのつながりは大事であり、その地域で子どもたちが育っていくことを考えると、地域外からの通学について工夫が必要である。

コミュニティスクールという意見も出た他、地域で見守られているという気持ちを持って学校へ通わせるには、といった意見も出た。

今回の討議では、交流をする中で違う視点を貰うことができた。

いじめを許さない人権教育や、教員の資質向上といった視点での意見について、後半で議論を深めることができた。

大規模校と小規模校で考えられる課題が、相反するものになるのか共存できるものになるのかという点について次の機会があれば深めていきたい。

C 班：先の説明からも児童生徒が減ることは分かっているので、極論としては、いずれは統廃合は避けて通れないとして考えた。

スクールバスを必要としない所からモデル校として統廃合をしていくという考えも出たが、市内の状況ではそのような学校は難しいのではということで、スクールバスの整備は必要という事になった。

学校を選択できるようにして、誰もが自由に学校を選べることを考えてみてはどうか。

そのためには、選んでもらえる学校ということは、いかに特色を出せるか、アピールできるのかが大切となり、スポーツ・芸術・外国語教育などに各校が取り組むべきではとなつた。

地域とのつながりは一番重要である。今は、中学生であれば職業訓練の機会でしか社会とつながりにくいものになっているので、学外から講師の方や地域の方、また職人などを迎え、学校内で体験型の授業をすることが情操教育につながり、経験として生きるのではないかという話になった。

目標すべき教育に関しては、いじめをしない、正しい性教育や校則の見直し、お金の教育といった視点も望ましいのではないかという意見もあった。

最後に不登校の対策としてインターネットを活用し、家にいながらの教育ができればいいと考えた。

委員長：各班の発表を聞いて、教育に関わるヒトやモノやお金をどんな風につなぐのかという事を感じた。

子供や教育の在り方をどうつないでいくのか、今、子供たちが減ってくることが目に見えている。発表では、統廃合が避けられないといった考え方や適正規模、学校選択制やスクールバスといったアイデアが出てきた。その中で、つながり方が色々とあっていいのであれば、近くに子供たちがいない場合、遠くの子供とのつながり方があるのでないか。スクールバスを使って多くの子供たちを集めることで行事や活動ができるのでは。

もっと遠くであればインターネットで海外との交流を深め、授業の充実やスーパーティーチャーの授業をオンデマンドで発信するといった事も、つなぎ方の在り方として考えてもいいのではないか。

もうひとつは、近くをつなぐという考え方もあり、空間的に身近な人を繋ぐというのもあってもいいのでは。子供が近くの学校に行くというだけでなく、直接自分の子供や孫でなくとも見守っていくことであったり、そういう人の憩い場として学校が活用されたり、また仮に統廃合されるのであれば、廃校ではなく、分校等によって活用し、子供に限らず人が集うことができるといった事も考えてはどうかと思った。

我々が子供を中心にどんな風に地域社会をつなげるかという視点で、近くでのつながり方と遠く或いは世界といったグローバルにつなぐ事も踏まえ、学校の再編・これからの中長期の在り方を考えることで、限られた資源を集約していくことにもつながっていくと

感じた。

他に何か意見があれば、グループ発表に関して補足などでもあれば。

委 員：不登校のための学校ができないのか。

建物としてつくるのかＩＣＴ活用なのかはあるが、授業に参画できても授業以外で切磋琢磨したり考え方触れることが必要であり、義務教育の義務を放棄するのではなく、レベルに応じて学校につながる事が必要だと思う。

委員長：子供によって学校との関わり方は濃淡があるものの、いろんな形での関わりがあると思う。

委 員：学校教育の備品も含めた設備について、クラブ活動での話で備品が少なかつたり縮小になってきているというのが前回にあったが、学校同士で貸し借りなどがあつていいのではないか。

委員長：資源を集約して有効利用の視点も大事である。

模造紙に貼り切れていない分は、事務局で集約を。

今、無い学校の姿も含めた色んなアイデアが出たと思うので、新しい学校の展望ができるような、まとめに向けた議論をやっていきたい。

#### 4. その他

① 次回の日程について

会議結果要旨のとおり。

その他特記事項

傍聴者 4人